

2016.09.23 於：衆議院第一議員会館 大会議室

NPO法人日本動物虐待防止協会（NIPPONSPCA）主催

動物愛護週間イベント「動物虐待のない世界へ」 参考資料

犬裁判所（最終回）2015年9月26日

## DogCourt\_FINAL\_26SEPT2015

### <はじめに>

Narration 「サンフランシスコは、最もペットに優しい町のひとつです。犬たちは大変愛されていて、その数は、子供の数を上回っています。しかし、サンフランシスコ（フリスコ：SFの愛称）では、すべての犬が人間にとってベストフレンドではありません。

市民や他の動物が犬に噛まれたり襲われたりする事件が、毎年 400 件以上も起こっています。こうした犬たちは逮捕歴があります。このような犬たちは、他の加害者と同じように、判事と向き合うことになるのです。」

判 事 「私は John Denny と言います。サンフランシスコの猛犬・危険動物裁判所の聴聞官（hearing officer）であり、犬裁判所の判事をしています。この裁判所で私は、年間に 100～150 件の事件を扱っています。」

### <事件 1>

判 事 「フェロニー・ジャック（犬の名前）には、逮捕歴（前科）がありますね。」

Narration 「ジョンと彼のチームは、裁判所でペットと人の間の（もめ事を）調停する仲裁人の役割を果たしています。」

巡査部長 「犬の裁判所があるなんて、面白いと思うかも知れませんね。」

判 事 「貴方はまだその犬の首輪を外して離しても良いと思っていますか。」

巡査部長 「貴方が犬に噛まれて救急車で運ばれたとします。または、貴方の犬が喧嘩などで噛まれて犬を病院に連れて行ったとします、いずれのケースも深刻な問題で有り、だれもそんな時に笑うことは出来ません。」

巡査部長 「犬の飼い主は、ジョナサン・リード、問題の犬はフェロニー・ジャックです。」

Narration 「7月27日、3歳半のピットブルがフェルトンハイの路上で警察官ジェリー・クナブーに突進していき、クブナー警官が3発を発砲したら、犬はびっくりして飼い主のところへ走って行きました。」

飼主 「彼はきつと何か臭いがしたので近づいて臭いを嗅ごうとしたのか、もしかしたら、marmaduke (強い犬) になろうとしたのかも知れません。」

判事 「貴方がフェロニー・ジャックを管理しなければいけないのです。貴方には再びフェロニー・ジャックがまた撃たれないように管理する責任があるのです。」

巡査部長 「ジョン (判事) はこの仕事を長く経験しています。確かに、私ほどではありませんが、経験も豊富ですから、彼は余人を以て代えがたいのです。」

判事 「そう、確かに時々彼女は私をクレージにするし、私は必要以上に沢山の電話を受けるし・・・とても忙しいんです」 (笑い)

巡査部長 「実際のところ、ジョンが猫派 (cat guy) であるとか、そんな秘密は絶対にばらしたくないの。」 (笑い) 「はいもう終了！」 (笑い)

## <事件 2>

巡査部長 「今日の聴聞は、暴れ攻撃的な行動を示す犬についてです。」

判事 「ジェース (犬の名前) がしたことは、猛犬・危険犬の行為そのものに該当しません。」

女性飼主 「私はジェースとアーティが6歳のこどもの側に居ることを100%許すでしょう。」  
‘I would allow Jase and Arty(?) around my 6 year old ... 100%.

判事 「そういう考え方自体、死ぬほど怖いことです。私を恐怖に陥れます。ジェースの行為は犯罪に当たります。ピットブルがどんな犬かを理解しないで飼ってはいけないのです。」

字幕 「判事は、ジェースを処分する命令を下しました。」

巡査部長 「時として、犬の飼い主は、犬と同じくらい教養があるとは限りません。」

判 事「私はみんなを平等に大切に扱うようにしています。それによって、犬の飼い主も自分たちの責任を理解してくれます。飼い主達は多くの場合、自分の犬が他の犬たちと楽しそうに遊んでいる写真を沢山見せてくれます。でも、私の手元には、わずか数枚でも、首にガードを付けられた犬がそこからつり下がっていたり、その犬が子供の顔に噛みついている写真があって、それをみているのですが、それでも飼い主は「でも可愛い犬なんです」と言うのです。」

判 事「そうなんです。私がやろうとしていることは、こうした飼い主や犬たちに光を与えることであり、また、彼らを光の中に送り込むことなのです。」

### <事件3>

シンディ「私はシンディといいます。4歳のバセンジー犬を飼っています。名前をイエティといいます。今日、私がここに来たのは、大晦日の日にイエティはルナに激しく襲われたからです。ルナとイエティはいつも非常に荒っぽい攻撃的な遊びをして、イエティはあちこちに怪我をさせられ、左の太腿にペンローズ管が突き刺さり、6針も縫うような傷を負わされました。回復するのに二週間もかかり、その間、まったく元気が無く、ぐったりしてしまいました。」

字 幕：被告犬ルナ、原告犬イエティ

判 事「今日の私の仕事は、ルナが猛犬で危険な犬かどうかを判断することです。」

シンディ「ルナはイエティの肩口にかみついて地面に投げ飛ばしました」

ルナの飼主「ルナがかみついて地面に倒れたと言えるかどうか・・・」

シンディ「私の犬を貴方の犬の口から離させないと・・・。」

ルナの飼主「その時まで、イエティは（ルナを）追いかけていたんだ。」

判 事「あなたはルナがイエティに襲いかかっているのを見ましたか？」

ルナの飼主「いいえ」

字 幕：判事は、飼い主に対し、ルナが外に出るときには口輪をはめるよう命じました。

シンディ「はい、今日の裁判での尋問は両者にとってとてもよかったと思います。判事は双方にいろいろ聞いてくれましたし。」

マイケル・スタッツ（ルナ側の弁護士）

「犬の裁判所は非常に重要だと思っています。サンフランシスコには多くの犬がいて口論になったり、こうした事件はよく起こりますから。」

判 事「あなたは、あなた自身の言葉で、今後は犬を連れ出すときには首輪をすと言えますか。」

女性飼主「もし首輪をしていたらこのようなことは起こらなかったと思います。」

<終わりに>

判 事「それぞれの事件について、（双方とも）非常に感情的になりがちですが、よく話を聞いていくと、最後には被告側も頷いて、「口輪や首輪をしておけばよかったとか」、「牛乳配達の男性が来たときにドアを開けなければよかったとか、あれ、今はもう牛乳配達の男性はいないかな？・・・こちらのいうことに理解を示してくれます。」

巡査部長「そうね。今は配達員は少ないと思うけど。」

巡査部長「サンフランシスコはとてもユニークな町です。私たち警察官が犬の権利を守るということも自体ユニークですし、また、犬のための裁判所があることもユニークです。」

判 事「犬が何か問題を起したときには、多くの場合、私たち（警察官や犬の裁判所）が問題をうまく解決することができるのです。」

翻訳：池田こみち（2016.09.12）